

「旧西尾家住宅」もう一つの歴史

吹田に残る
牧野富太郎の笑顔の伝説

新山ひろし

植物の精
牧野富太郎との出会い

「植物の精」として知られる稀代の植物学者・牧野富太郎（文久2年1862〜昭和32年1957）が、吹田に縁があるということは何度か聞いたことがあった。それに、吹田名物と言われる「吹田慈姑」の命名者でもあるらしい。一度、じっくりと調べてみたいと思っていたら、平成

19年6月、「牧野富太郎博士没後50年展」が吹田市内本町にある「旧西尾家住宅」（吹田文化創造交流館）で開催された。旧西尾家とは、代々、上皇の所領「仙洞御料」に米や野菜を納入した庄屋で、数寄屋風を意識した主屋、茶道



吹田くわいを持っておどける牧野富太郎

の精神を実現した茶室などが残されている。牧野博士も度々、逗留したことがあるらしい。僕は、この催しを通して、牧野富太郎博士と吹田市との縁が抜き差しならないものであることを知った。数日後、富太郎博士の残されたエピソードなど聞けないものかと、イベントの企画を担当した「旧西尾住宅・渡路洲倶楽部」に連絡を入れると、企画立案の奥谷英夫さんと小原淳男会長にお会いすることができた。

牧野富太郎の
吹田におけるエピソード

「吹田における牧野博士のことを知っている方はいませんか。」といきなり聞いてみた。「没後50年ですからね。数年前ならともかく、直接牧野博士とつきあったという人は知りませんね」とお二人。「でも、お人柄に関するエピソードならたくさん聞いていますよ。」と小原さん。「あつ、それ聞かせてください。」思わず大きな声を出してしまった。「牧野博士はいつも貧乏で、でも書籍とかはほとんど購入して、い



牧野富太郎ゆかりの温室跡。奥に見える離れと渡り廊下でつながっていた。手前の防火水槽は、プールとして地元の子どもに開放された。

つもピーピー。それで、奥さまが商売して生活を支えられてたんですね。」「先生は、いつも三つ揃いに蝶ネクタイで、植物採集するドウランを肩から提げて野山を歩き回ってたんです。ダンディですよ。」「13人の子供がいて、まあ、成人したのは6名ですけど……」お二人の、牧野博士へのエピソードの語りには、すぐ近所のおじさんのことを語るように親しみ深く愛情があふれている。

二代にわたる西尾家と
牧野博士の因縁

「そもそも、牧野博士と西尾家との出会いは何なのですか。」と聞けば、奥谷さんは「西尾家11代目の義成（文久3年〜大正14年）が牧野博士の支援を行い、吹田くわいの研究などの手助けをしました。」と言う。年譜を見ると、西尾家の11代義成氏は、富太郎の一つ下、ほぼ、同級生ということになる。モダンな茶人だった11代となら、さぞや親密な交際が生まれただろう。

十二代と
博士の共同の夢

そして、その12代と博士の絆となった温室跡を案内していただくことになった。温室跡は、コンクリートがむき出しで、巨大オブジェ、あるいは廃墟のようにも見える。「温室とはいいますが、地下で石炭を焚いてボイラーを沸かし、メロンを栽培していたそうです」と奥谷さん。「戦争の時、ガラスが反射して敵の目標になるというのでガラスはみな破壊されてしまいました。」と小原さん。以来、温室は再現されていないというが、少し、惜しい気もする。地下に転がった、植木鉢類も牧野博士がいた頃のものだとすれば、何だか、夢がそのまま放置されている



吹田くわい

気がする。このまま放置していいものだろうか。

「12代の愛太郎さんは、子どもの頃、牧野博士と会ってまずよね。牧野博士の影響で、東大の農学に進んだんですか。」と質問すると、「さて、それは……その頃の資料がまったくないんですよ」とお二人。では、推測してみよう。年譜で12代の年齢を見ると、牧野博士より33歳下である。明治45年に牧野富太郎が東大の理学部の講師になった時、50歳だから、その時、愛太郎さんは17歳、西尾家で出会って何らかの影響があっても不思議ではない。「あの、朗らかな居候のおっちゃん」と見えていたかも知れない。そして、東大での再会。それから、大正14年、11代義成氏が死去し、愛太郎さんが12代を継いだ。この時、牧野博士は64歳、12代は31歳。新たな二人の交流が始まったとみていいだろう。その中で、この巨大温室が計画されていたのではないか。「温室は昭和2〜3年に作られたと言われています」と奥谷さん。温室の側には、防火水槽がある。12代は、この水槽をプールにして、近所の子どもたちを遊ばせたとい

牧野博士の
笑顔が伝えるもの

温室を見た後、吹田慈姑が栽培されている場所を案内してもらった。「吹田慈姑」は「スイエニス・マキノ」という学名らしい。新発見ではないのだが、世界で初めて学名が付けられる場合、発見者の名前を付けるというのが学会のルールである。決して、博士のエゴイズムではないだろう。

お二人の話聞き、牧野博士の写真などを見ていると、僕なりに博士の人柄というのが浮かび上がってきた。写真はいつもおどけたような笑顔である。

その魅力とは、一言でいえば植物への無償の愛に他ならない。今も牧野博士と12代の関わった温室跡の前に立てば、ひたすら牧野富太郎の思いが僕の胸に迫り、植物への愛が廃墟のような場に陽炎のように揺れるのである。



【上】牧野博士が関与したとされる温室跡。この地下にボイラー室があった。右・奥谷英夫さん、左・小原淳男さん
【下】温室跡の地下にこもっている当時の植木鉢など

